



岐阜市指定文化財 亀姫像（部分）

江戸時代前期、17世紀前半 盛徳寺（岐阜市）蔵

加納藩主奥平信昌の妻・亀姫の肖像画。亀姫が座るのは、厚みのある纏紵縁の上置で、その上には鳳凰文（緑）・唐草文（内側）があしらわれた敷物が敷かれています。上部には蜘蛛の巣文様の入った団花文を散らした帷が巻き上げられ、御簾の手前には瓔珞（御簾飾り）が金色に輝き、神殿風の飾りとなっているといえるでしょう。小袖の上に羽織る打掛には、葵文が散らされており、徳川家康の娘であることが印象づけられます。

なお、同図様の肖像画は、亀姫ゆかりの光国寺（岐阜市）・久昌院（京都市）・大法院（京都市）・自性寺（中津市）にも伝わります。

（企画展「加納藩～江戸幕府を支えた270年～」にて展示。展示期間：4月25日～5月21日）

企画展

加納藩 ～江戸幕府を支えた270年～

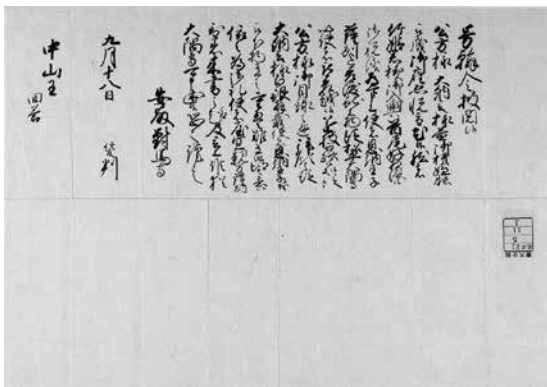
2023.3.25(土)～5.21(日)

徳川家康は、関ヶ原の戦いに勝利した後、加納に城を築き、自身の娘婿である奥平信昌へ加納の地を与えました。これ以降、明治4年(1871)の廃藩置県まで、藩主が交代しつつも加納藩の歴史は続きます。

本展では、藩主や藩士、藩領の町人や村人たちについて取り上げ、譜代大名として江戸幕府を支えた加納藩270年の歴史をたどります。

1章 加納城と加納藩主

最初の加納藩主である信昌は、天正3年(1575)の長篠の戦い後、家康の長女・亀姫を妻に迎え、4男1女に恵まれました。三男の忠政が2代目藩主となり、その後、忠政の子・忠隆が継ぐも、後継ぎがないまま亡くなり、奥平氏は3代で断絶。以降、加納藩は大久保氏、戸田(松平)氏、安藤氏、永井氏によって治められることとなります。



国宝 安藤信友老中奉書写

原本：享保16年(1731)

東京大学史料編纂所蔵

展示期間：3月25日(土)～5月7日(日)

上の史料は、加納藩主・安藤信友が琉球国王

の尚敬王に宛てた老中奉書の写しです。老中奉書とは、老中が將軍の意を奉じて発給する公文書のこと、本書は、將軍養女の嫁入り祝儀についての知らせを写したものです。信友の老中就任期間〔享保7年(1722)から同17年〕は享保の改革と重なっており、信友は老中として8代將軍・徳川吉宗を支えました。

2章 城下の人びと

では、城下町である加納はどういった様子だったのでしょうか？それが分かるのが、歌川広重が描いた「木曾海道六拾九次之内」です。画面手前には大名行列が描かれ、街道沿いには商店が、奥には加納城が確認できます。この作品が示す通り、加納は城下町であると同時に、宿場町、商業の町でもありました。



木曾海道六拾九次之内 加納

天保10年(1839)頃 歌川広重画

岐阜市歴史博物館蔵

展示期間：3月25日(土)～4月23日(日)

宝暦5年(1755)の加納に住む人びとの生業を見てみると、旅籠屋など旅宿経営が最も多く、898軒中50数軒であり、宿場町としての性格が強かったことが見て取れるでしょう。その次は大工33軒、萱葺屋20軒、魚屋17軒と続いており、幕末に加納の特産品となる傘については、この時は5軒しか営んでいませんでした。

町人たちは本業に励む一方で、詩文や書画などの文芸をたしなんでいました。「詩歌連誹琴棋書画茶花会画」は、天保11年(1840)の関善

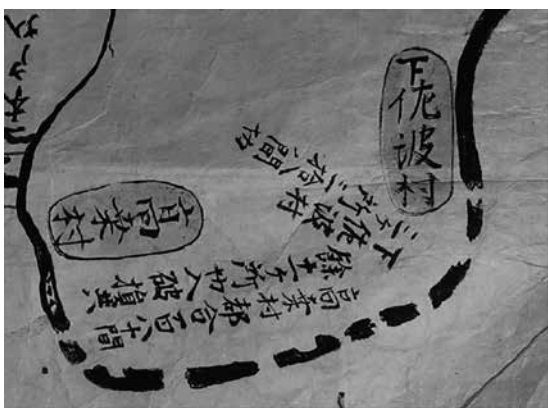
光寺（宗休寺／関市）での文人サロンの様子を
描いたものです。全参加者378名のうち、加納
からは23人が参加しており、趣味を介した人び
との交遊がうかがえます。



詩歌連誹琴棋書画茶花会画（部分）
天保11年（1840） 岐阜市歴史博物館蔵

3章 村の人びと

藩財政の基盤である領知については、奥平氏
時代が10万石であったのに対し、大久保氏は5
万石、戸田氏は7万石、安藤氏は6万5000石、
永井氏は3万2000石と、石高が漸次減り続けて
いました。これに加えて、加納藩領では20回以上
の洪水に見舞われており（『岐阜県治水史』）、
財政は潤沢とはいえませんでした。



洪水絵図（部分）
明治時代 岐阜市歴史博物館蔵
展示期間：4月25日（火）～5月21日（日）

度重なる洪水の中でも特に被害が大きかった
のが寛政10年（1798）の洪水です。この時の被
害状況を示した「洪水絵図」を見てみると、堤
（黒い線）が点線のように書かれており、大部

分が決壊したことが分かります。農作物も大打
撃を受け、人びとは食べ物にも困るような有様
であり、同年12月には総勢1000人ほどの百姓た
ちが田畑の年貢免除を求めて城下まで押し掛け
ました。相次ぐ水害は、百姓たちの生活を苦し
め、藩財政も悪化の一途をたどることとなった
のです。

エピローグ 加納藩の終焉

慶応3年（1867）に徳川慶喜が^{とくがわよしのぶ}大政奉還する
と、加納藩主・永井尚服も^{ながいなおこと}若年寄の職を辞して
朝廷に恭順。明治2年（1869）の^{はんせきほうかん}版籍奉還の際
には加納藩知事に任じられるも、同4年には^{はい}廃
藩置県となり、加納藩の歴史に終止符がうたれ
ることとなりました。

しかし、人びとの繋がりが途切れることはな
く、明治17年（1883）には、東京に移住してい
た元藩主・永井尚服およびその息子の^{なおとし}尚敏が、
かつての領地を訪れています。そのうちの1つ
である^{しもさば}下佐波村では、旧庄屋の^{ひさもり}青木久衛家を訪
れ、久衛の息子・富
太郎（後の^{はらさんけい}原三溪）
の書画を観覧しまし
た。

「乱牛図」は、尚
服らが青木家を訪れ
る約4～5ヶ月前
に富太郎が描いたも
のであり、もしかす
ると旧藩主が鑑賞し
た作品の1つだった
かもしれません。

このように、江戸
幕府瓦解後も加納藩
主や家臣や町人・村
人との結び付きは絶
えることがなかった
のです。



乱牛図
明治17年（1883）
青木富太郎画賛 個人蔵
展示期間：4月25日（火）
～5月21日（日）

収蔵作品展

2022.12.20(火)~2023.4.23(日)

当館は、平成3年(1991)5月11日「岐阜市出身で日展を中心に制作活動をつづけ、全国的に高い評価を受けている加藤栄三・東一兄弟画伯の画業を顕彰するとともに、地域の美術普及活動の充実、文化の振興に寄与する」ことを目的に開館し、今年で33年目を迎えます。その間多くの方々からご寄贈をいただいた作品や購入、借用してきた作品を企画展の中で紹介してきました。しかし、展覧会の趣旨に合わない題材や、栄三・東一以外の作家はこれまで未公開もしくは、ほとんど展示されてきませんでした。

今回、新たに栄三・東一両画伯にゆかりのある作家の作品など15点の寄附を受けたことで、これまで紹介できなかった作品と併せ地域を代表する画家の作品を紹介する機会を得ることができました。



加藤東一「伝承」

具体的には加藤栄三とともに創造美術を立ち上げた山本丘人、昭和から平成の日本画壇を牽引し日本画五山に数えられた杉山寧、加山又造、高山辰雄、前田青邨の高弟で大垣市出身の日本画家、守屋多々志、日本のフォービズムと言われ歴史上の人物表現に独自の解釈を加え人気を博した日本画家、片岡球子などの作品です。

こちらの作家が駆け抜けた日本画発展の時代



山本丘人「瀑」

を見ていくと、昭和9年(1936)に結成された「瑠爽画社」とその姿勢を受け継ぎ第6回展より東一が出品を始めた「一采社」について触れておかなければなりません。



高山辰雄「蓬萊」

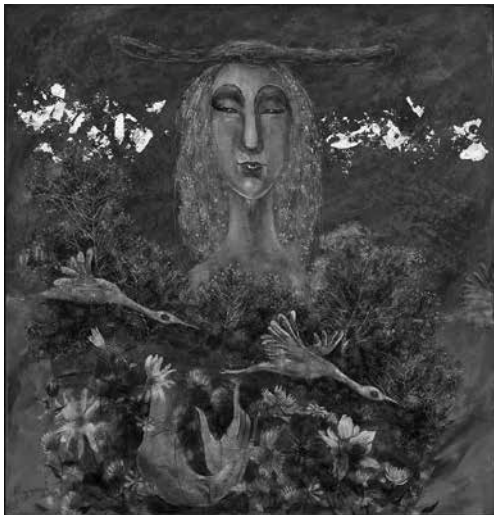
「瑠爽画社」は東京美術学校在学中であった杉山寧に師：松岡映丘が呼びかけ、同門の弟子にあたる山本丘人の参加をもって発足した日本画研究会です。伝統的な大和絵の近代化に大きな業績のあった松岡映丘が起こした「木之華社」「新興大和絵会」に続く新しい研究会にあたり、後に「瑠爽画社」は「一采社」と改名し、高山辰雄に引き継がれます。「瑠爽画社」「一采社」は閉鎖的な日本画の状況を打破し次世代日本画の一端を構築した実績のある研究会として一時代を築きました。敗戦後は大衆生活から離反した日本画自体の存在を批判される中、翻弄されながらも変革を受け入れ活動を続けてきましたが昭和36年(1961)の20回展をもって閉会しました。改めて昭和から平成日本画の変革期を生き抜いた作家たちの作品が展示できること、この場をお借りして御礼を申し上げます。

加藤栄三・東一記念美術館

野田龍二・渡辺久子 洋画二人展

2023.2.28(火)~4.23(日)

美術団体新制作協会で活躍する野田龍二、渡辺久子を紹介しします。野田龍二は岐阜市在住、渡辺久子は可児市在住で、ともに岐阜を拠点に活躍している洋画家です。二人が所属している美術団体新制作協会は昭和11年(1936)、帝展(現日展)で活躍していた洋画家、猪熊弦一郎、小磯良平らによって設立された美術団体です。官展改組に異を唱え自由と純粹芸術の追求をモットーに設立された新制作協会(発足時は新制作派協会)は当時注目を集め、後に彫刻部門が新設され柳原義達、佐藤忠良、舟越保武が加わりました。



野田龍二「望景」

岐阜市出身の野田龍二は加納高等学校美術科から多摩美術大学絵画学科油画専攻へ進学し、卒業後は洋画家、猪熊弦一郎にあこがれ新制作協会を活躍の舞台に選びます。野田が求めた絵画表現は目の前にあるモチーフを忠実に描き表すだけではなく、夢で見た光景や古い記憶、深層を呼びおこしながら画面に描いています。そ

の制作スタイルは新制作協会が発足時に掲げた“自由と純粹芸術”を踏襲し、体制に翻弄されない強固な姿勢を貫いています。ゆえに岐阜洋画壇との確執もあったようですが、野田が目指した制作姿勢とシユールな画面づくりは、今も岐阜の洋画家の中で特出した存在となっています。



渡辺久子「伸びる緑」

渡辺久子は岐阜県可児市出身で、大学(美術デザイン専攻)在学中より新制作協会で活躍していた筒井明に師事し油彩画を始めます。その後筒井明の導きで、新制作協会へ出品しながらギャラリーでの個展を開催するなど精力的に活動の場を広げて行きました。平成8年(1996)に新制作作家賞を受賞してから、さらにその勢いは止まることなく、平成17年(2005)に新制作協会会員に推挙されます。画面から醸し出される柔らかな現象は光や風をイメージしたものであり、現実の風景の中に確かに存在する目には見えない光や風という現象は渡辺が求め、伝えてきた時の流れです。時間の経過の中で対象は変化しても“時の流れや風のようなもの”をつかもうとする気持ちは、子供の頃より絵描きになることを目標に歩んできた道のりのなかでも生き続け、現在(いま)に至ります。

本展覧会では同じ会派でありながら違う方向でそれぞれが求める理想を追求してきた野田龍二、渡辺久子という洋画家二人を通して作家の本来あるべき姿を再確認してください。

企画展

ちょっと昔の道具たち

2022.11.23(水・祝)～2023.3.5(日)

今年度で開催27回目を迎えた「ちょっと昔の道具たち」。本展覧会は、小学校3年生の社会科単元である「市の様子と人々のくらしのうつりかわり」と関連させ、今と昔の道具やくらしのうつりかわり、生活の知恵などを紹介します。

1章 展示構成について

展示室は「道具のうつりかわり」、「まちかど」、「家のなか」の3つのコーナーに分かれています。「道具のうつりかわり」では、食事をする道具、計算をする道具など、特定の道具に焦点を当て、江戸時代から現代まで各時代ごとに実物の資料を紹介しながら変遷を辿ることができるようになっています。また「まちかど」では60～50年くらい前（昭和30～40年代）、「家のなか」は100年くらい前（大正～昭和初め）と、それぞれ時代を設定しジオラマ形式で展示している他、各コーナーに体験できる資料が置かれているため、来館した方が「見る・聞く・触る」ことによってそれぞれの暮らしの変化や違いを感じていただき、子どもから大人まで異なる世代の方に楽しんでいただける展覧会になっています。

2章 今年度新設したコーナー

本展の展示企画や見学方法については、岐阜市小学校社会科研究会の先生方と開催する博学連携委員会や、前年度学校団体来館時に配布した教員向けアンケート、また同じく前年度実施した来館者アンケート等をもとに毎年見直しを行っています。

1. 路面電車コーナー



「まちかど」内 路面電車コーナー

今年度は「まちかど」内に、路面電車コーナーが新しく登場しました。

岐阜市周辺では明治44年（1911）、美濃電気軌道によって駅前～今小町間、神田町～上有知（後の美濃駅）間が開通して以降、路線が拡大していきましたが、昭和35年（1960）に高富線、39年に鏡島線、63年に岐阜市内線の徹明町～長良北町間、平成11年（1999）に美濃町線の新関～美濃町間が廃止され、平成17年に全廃となりました。

通常、路面電車の軌道敷内は車両の通行が禁止されていますが、岐阜市内は道路の幅が狭いため、電車が走行していない時は通行が可能となっていました。また同様の理由から路面電車停留所（電停）の安全地帯が岐阜駅前をのぞいて設置されていませんでした。今回は展示室の一角を道路に見立て、電停で人が乗り降りしている横を車が避けて走行する様子を再現しました。また、関係する資料として、路面電車の前照灯、名鉄美濃町線で使われていた行き先表示板、美濃駅で使われていたお忘れ物・伝言板等も合わせて紹介をしています。

2. 豆腐屋さん

また、同じく「まちかど」内では、昭和30～40年代の豆腐屋さんの販売形態を再現しています。当時は豆腐を入れた箱を自転車やリヤ

カーに乗せ「パーパー、パーパー」とラッパを吹きながら街を回って売り歩く移動販売が多く見られ、ラッパの音が聴こえるとお鍋やボウルを持っていき、その中に買った豆腐を入れてもらいました。今はスーパーをはじめとする大型店舗での販売が増え、このような販売方法はほとんど見られなくなっています。



「まちかど」内 豆腐屋さん

3. 時計コーナー

「道具のうつりかわり」では、「時間をする道具」として時計のコーナーを設けました。江戸時代に使われていたいっしょうてんぶわりこましきもじばんやぐら一挺天符割駒式文字盤どけい時計や尺時計をはじめ、ゼンマイ式掛時計、オルゴール付置時計などを展示し、時間をする道具の変遷を紹介しています。



「道具のうつりかわり」時計コーナー

その他1階特別展示室ラウンジでは、「あそび広場」が4年振りに復活しました。コマ、お

手玉、けん玉、おはじき、ビー玉など昔の遊びが体験できるこのコーナーでは、学校団体見学時は勿論、土日祝日にもたくさんの来館者の方にご利用をいただいています。

3章 ボランティア活動及び学校団体利用

今年度は新型コロナウイルス感染症が拡大して以降、ボランティア活動を休止していた「ものしり博士」が3年振りに活動を再開しました。50名の方が「ものしり博士」に登録し、学校団体が来館する平日を中心に各コーナーの体験補助や展示解説を行っています。子どもたちが「ものしり博士」による解説、体験談等を熱心に聞く様子が連日多く見られます。

中高生による博物館学芸員ボランティア(SMC)による活動も行っています。中高生が自分で調べ学んだことを、キャプション作成や展示室での解説活動を通して、当時の人々のくらしの様子や知恵を来館者に伝えています。「ちょっと昔の道具たち」では、25名の中高生が申し込みし、活動しています。

本展は毎年学校団体に校外学習の場として利用いただいております。今年度も多くの利用予約をいただき(令和5年〈2023〉1月末時点118団体)、連日たくさんの子どもたちが本展を見学に訪れています。昔のおもちゃを販売する「なんでもや商店」の利用もあり、子どもたちが楽しそうに好きなおもちゃを選ぶ様子も見られました。

学校見学が終了した際、「これは知らなかった」「昔の人は苦労して、工夫して進化してきたんだ」「こんなことが分かったよ!」と楽しそうに話す子どもたちの姿が多く見られます。そして、学校見学をした後日、家族とともに再度来館し自ら案内する姿からも、生き生きとした子どもたちの様子が感じられます。

月見布袋図 白隠慧鶴画賛

江戸時代 18世紀
縦51.0 cm 横79.0 cm

白隠（1685～1768年）は臨済宗妙心寺派の僧で諱は慧鶴。駿州の原宿（現沼津市）の旅籠の家に生まれました。岐阜とも縁が深く、宝永元年（1704）から翌年にかけて美濃で参禅を繰り返し、享保元年（1716）には巖滝山（美濃加茂市山之上）に籠山、宝暦8年（1758）には求めにより美濃の各地で講会を開いています。右図は、その巡錫の過程で岐阜に伝来したものと考えられます。



白隠は60代以降、多くの禅画や書籍等をもって臨済禅の教化につとめました。白隠の描く画は奇抜でありながら、親しみやすい点に特徴があります。本作品の賛には「布袋 舟にのり 月見と出かけた所」とあります。舟で月見に乗り出した布袋さん。月を求めて漕いでいきますが、どれほど漕いでも月に手が届くことはありません。しかし、よく観ると、手元の袋が月にも見えます。欲しいもの（幸せ）は案外近いところにあるものです。

利用の御案内

■ **開館時間** 午前9時～午後5時
（歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館の入館は午後4時30分まで）

※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

■ **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始（12月28日～1月3日）
（月曜日が祝日の場合はその翌日）

※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。

■ **観覧料** ◎歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
（団体は20人以上）

高校生以上…310円（団体250円）

小中学生…150円（団体90円）

両館共通で観覧される場合

高校生以上…520円（団体410円）

小中学生…260円（団体150円）

※特別展は、その都度料金を定めます。

◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。

①岐阜市在住の70歳以上の方（特別展を除く）

②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けている方、及びその介護者1人

③家庭の日（毎月第3日曜日）に入館する中学生以下の方

④③に同伴する家族（高校生以上）の方（特別展を除く）

⑤岐阜市内の小中学生

◎原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。

交通案内

◀歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館▶

JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、徒歩約5分。岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

お車でおこしの際は、岐阜公園駐車場をご利用ください。詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。

<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp/>



◀原三溪記念室▶

岐阜バス西部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行きに乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分

岐阜バス西部三田洞線 もえぎの里及び高桑行きに乗り、「もえぎの里」で下車、徒歩すぐ

博物館だより No.113 2023.2

編集・発行 岐阜市歴史博物館

（分館）加藤栄三・東一記念美術館

（分室）原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階

☎058(265)0010

☎058(264)6410

☎058(270)1080